

# SSKW

# 海から海へ

No.18 2008.10.3【編集人】

特定非営利活動法人 海から海へ  
〒182-0024 東京都調布市布田 1-32-5

マートルコート調布 407

Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878

<http://umi.or.jp> [office@umi.or.jp](mailto:office@umi.or.jp)



もみじ山のねこ A Cat in Mt. Momi,ji 727x606 1994 © Mizuki Tanaka

海から海へは、障がいをもつ人から渡される豊富なものの存在に気づき、人々と共有するため、障がいをもつ人を中心とした、文化芸術活動、研究活動、社会教育活動、心理カウンセリングなどの支援活動を行うこと、および、それらの活動を通し、障がいの有無にかかわらず、地域・国内・国外を問わず広く交流を深め、人々がより良く生きることに貢献することを目的として活動しています。

## 魂のトレーニング

娘Mは、洪水のように押し寄せる情報の中で身を処してきた長い経験から、オウム返しという方法で身を守る。欺瞞に満ちた世界では、その方法は有効だ。

これを防御のモードと言うなら、彼女はそうでない別のモード(魂のモード)をもつ。彼女自身はモードの変換をしない。変換は、相対する者が体験すること。そして、トレーニングを要する。まず、私が彼女から受けたトレーニングの例をいくつか紹介したい。

Mはおみやげを買うことが楽しみで旅行に行く。着くとすぐにおみやげを買う。おみやげは好きな友だちSさんに渡す。

帰るとSさんにメールを書き、いつ会える?と聞く。それから会える日まで、幸福な、しかしちょっと不安でもある時間を過ごす。

Mは宣言する、「おみやげはSさんのだからバツ」と。「そうバツ」と私。「9月20日、Sさん来る」「来るね。6時だね」「おみやげを渡す」「渡すね。いくつ?」Mは指を折って、「平湯と、京都と、京都の高島屋と、…」

Mは髪をポニーテールにしている。少し下で結わくとお姉さんらしくなるが、彼女に合う位置があって、その位置に結わけるのは母親のみである。初々しくかわいい。

Mとの最近の話題は、ポニーにせずに、「そのまんま」にしておくこと。つまり、ストレート。これだと食事のとき、顔にすだれがかかって食べるものがよく見えなくなる。場合によっては髪がヨーグルトのブラシになりかねない。

Mは、「そのまんま?」と言って、ニコニコしている。「そのまんま?いいね。お姉さんいいね」と私。しばらくして、「ポニーがいいね」とM。「そうだよ、ポニーじゃないと、Nさんがびっくりするよ」と私。「Nさんびっくりー」(「びっくりー」は抑揚とリズムつき。)

Mはいつも爪をきれいにしておく。切りすぎてバンドエイドが必要になる。「痛くしちゃったの」とM。「それは心配、切りすぎちゃったのね」「そう、切りすぎちゃったの」「血が出ると、Nさん心配するね。涙が出るよ」「涙がでるの?」「うん、涙がジワッと。どうするの?まずいよ。切り過ぎないようにしよう」「反省だね」「うん、反省だ」

Mのことばは表情と一体になって私を動かす。動かされた私からことばが出る。これは魂のトレーニングである。私のことばは、私そのもの、私の根源、私の魂であると思う。

トレーニングを受けた私は変わった。私は分かった。私の仕事は学生のことばを聴きとり、そのことばに意味をつけることだ。少し広く言えば学生が自分を肯定できるようにすることだ。

人は自分にとって楽しく幸せと思えることが発見できればうれしい。そのことを誰かに認められ、さらにそれが社会にとって意味があると知ればもっとうれしい。そういう作業を学生とともにする。それが私の仕事の意味であり、望まれていることだと気がついた。

Mは仕事に行くとき、玄関で「Nさんが待ってる、Oさんが待ってる、Iさんが待ってる、みんなが待ってる、皆さんが待ってる」と言って出かける。(私たちもそれに唱和する形になる。)実にうれしそうにそう言う。

Nさん、Oさん、IさんはMの職場(老人ホーム)の同僚であり、「みんな」はそのほかの同僚である。「皆さん」とは職場の利用者さん方である。

そして、私が職場に出かけるときMは、「パパは誰が待ってる?」と聞く。はじめ私は「うっ」とことばにつまった。そして、あっ、そうだと思った。「うん、S君がパパを待ってるよ」と答えた。そうだ、K君も、O君も、F君、Y君、B君、みんな待ってると思った。こう思ったとき、なんとも言えない嬉しさに満たされた。実際そうだ。みんな私を待っている。その気持ちは学生とのゼミに現れる。



京都でのひととき



京都でのお月見



私は今まで、彼らから「ありがとうございました」と言われるのを当然と思う気持ちがあった。今は私が「ありがとう」と言う。彼らは興味をもって勉強し、考えたことを分かりやすく説明してくれる。私は知らなかったことを知り、おもしろいと思い、私も持っている知識に基づいて意見を言い、先へ進む。そのことに感謝する。当たり前のことだと今は思う。Mのおかげだ。

このことに関連してもう一つ、専門家における魂のトレーニングについての話。京都でのこと。京都ではNPO在宅ケアを支える診療所・市民ネットワークが主催するシンポジウムに参加した。

ALS（筋萎縮性側索硬化症）を発症したK氏は車椅子で参加した。彼は病院から出て在宅で生活している。K氏の支援者が、そこに至るまでの3年間の経緯を説明した。

K氏が入院していた地元の病院の専門医は難病に対するすべを知らず手をつかぬ、医療ソーシャルワーカーは、退院を希望するK氏に対し、「今の状況では在宅で暮らすことはできない」というばかり。知らないことを知らないと言わず、それはできないと言う。

その中でK氏はある国立病院の医師N氏に出会った。N氏は難病であっても医者がK氏に対してできることを詳細に語られた。それが大きな転機となり、K氏は支援の輪を広げ、在宅生活を実現できることとなった。

N氏は専門家として知っていることを話し、知らないことは知らないと言い、K氏にとって必要なことを、自分にはできなくてもそれができる人につなげた。

これは推測だが、N氏は、仕事の中で多くの患者さんからたくさんのお話を学んできたのではないだろうか。その学びは魂のトレーニングによるものだったのではないだろうか。

この社会では、「障害」ということばはマイナスの価値を付与される。そのような社会こそ欺瞞に満ちている。ほんものはそこにはない。そのことに気づかせるのが、魂のトレーニング。

【阿部公輝】



京都でのシンポジウム

### 展覧会のお知らせ 2009年7月19日～10月12日

南牧村美術民族資料館

長野県南佐久郡南牧村野辺山 79-3 (小海線野辺山駅前)

主催：南牧村教育委員会

4月に『みずきのびじゅつかん』が出版されてから、多くの反響があった。懐かしい知己の方々からも手紙や電話等をいただいた。長野県南牧村在住の緒方奎介さんもその一人。

かれこれ10年以上も前、根雪がまだある3月頃だったろうか、彼のアトリエにお邪魔した。夥しい書籍の山、白銀世界の雪うさぎが1匹、描きかけのキャンバスにいた。手作り餃子をごちそうになった。彼の伸びやかな声に呼応して、いくつかの記憶がよみがえってくる。

しかし、ここ何年か彼が野辺山にある南牧村美術民族資料館で学芸員の仕事にも携わっていることは知らなかった。「瑞木ちゃんの絵はすごいな。瑞木ちゃんはいくつになったの。一度絵を全部見たいね。今度行くから」

それから1週間もしないうち、唐突に現れた緒方さんは1枚1枚、絵の前に立つたび「これはすげー。すげー」「感動するね」と声を発し続けた。その場にいた私たちは、そのような彼の姿にすごく感動した。

学芸員は企画する展覧会の第一感動者であるはず。間違いなく、あの日の緒方さんは絵描きでもグラフィックデザイナーでもなく、学芸員そのもの。展覧会は、こうして始まることに。展示に工夫を凝らしたいと張り切っている緒方さん。皆様2009年7月をどうぞお楽しみに。



南牧村美術民族資料館

### 「夫婦の好ましいコミュニケーション講座」

2009年3月7日(日)午後1:30

詳細は次号でお知らせいたします。

**平成20年度通常総会**  
2008年5月26日

通常総会で次の役員が選出されました。任期は2年(2008年7月1日～2010年6月30日)です。

- 理事長 阿部公輝
- 副理事長 阿部愛子
- 理事 白井隆之
- 理事 高安幸子
- 理事 田中和己
- 理事 本間俊典
- 監事 田中玲子

海から海への設立当初から理事であった本間康浩さんが退任され、新たに調布うつわ和季の店主田中和己さんとシャドーボックス教室アトリエエソレを主宰する田中玲子さんご夫妻がそれぞれ理事と監事に就任しました。また、昨年度まで監事であった高安幸子さんが新たに理事に就任しました。

今年度も芸術、心理、社会福祉を中心に、実践と研究を通して学びを深め、広く社会に貢献していきたいと思いません。どうぞよろしくお願いたします。

**平成19年度会計報告** (単位:円)

I 経常収入の部	
1. 会費収入	42,000
2. 寄付金収入	336,600
3. 受取利息	750
経常収入合計	379,350
II 経常支出の部	
1. 事業費	
(1)障がいをもつ人を中心とした芸術活動の支援と作品の公開展示	5,069
(2)障がいをもつ人を中心とした心理教育社会福祉研究と実践	21,435
(3)障がいをもつ人を中心とした交流の促進	28,488
(4)芸術、教育、心理、福祉などに関する社会教育	298,211
(5)障がいをもつ人とその関係者のための個別相談、教育支援、生活支援	0
(6)活動に関する広報および成果の公表	327,440
(7) (1)～(6)の事業活動のための募金	0
2. 管理費	123,664
経常支出合計	804,307
経常収支	△424,957
前期繰越	1,511,615
次期繰越	1,086,658



縞すすき (スケッチ) 2008 ©Mizuki Tanaka

**編集後記**

花の絵が数枚ある。どなたかがカレンダーがほしいと言われた。花の絵のカレンダーができたらいいねと思い、瑞木に描いてもらっている。昨年、シベリアン・リリー、ポインセチア。いまは縞すすきが進行中。

花野というすてきな名前の駅前の店で、鶏頭とすすきを求める。夏の余韻を真っ赤にあらわす鶏頭。縞模様の葉が風に揺れて自由を満喫するすすき。

迷わず、すすきを選ぶ瑞木。1メートル以上のすすきがどう描かれるのか、興味津津の私。出来上がったスケッチを前にして、私はすすきのように首を垂れる。

「さすが、みーちゃん！」 (愛)

特定非営利活動法人 海から海へ  
<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp  
 2008年10月3日 海から海へNo.18  
 編集責任者 阿部公輝  
 〒182-0024 東京都調布市布田1-32-5  
 マートルコート調布407  
 Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878  
 発行所 〒157-0073 東京都世田谷区砧6-26-21  
 特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会  
 定価200円  
 無断転載禁止